
KRA不定期通信／コマツ・リサーチ・アンド・アドバイザー（代表：小松 啓一郎）

〈今号のメニュー〉

【1】はじめに

【2】オピニオン:「本質的なリスク対策」（濱 美恵子）

【3】ロンドンつれづれ雑記帳:「今日も歴史」（毎熊 千代子）

【4】事務局からのお知らせ

【1】はじめに

前回の発信から、暫く開いてしまいましたが、その後、皆さまは如何お過ごしでしょうか。KRA 代表の小松はと申しますと、最近「アルジェリア」関係の質問が殺到し、講演会でも、この事件の関連で、「今後の日系企業の海外進出」についてお話しすることが多くなっています。今回は代表が出張中のため、スタッフの方で、普段感じていることを紹介させていただきます。弊HPにもオピニオンやレポートを載せておりますので、ご覧いただけますと幸いです。（濱）

是非皆さまもご意見・ご感想をお寄せ下さい。

KRA 発信情報はこちら: <http://komatsuresearch.powweb.com/wordpress/ja/kratoday>

【2】オピニオン:「本質的なリスク対策」（濱 美恵子）

http://komatsuresearch.powweb.com/wordpress/wp-content/uploads/2017/06/KRA-opinion_Glocal-Solutions-to-CountryRisks.pdf

今回のアルジェリア事件後、「アフリカは危ない」というイメージを持たれた方々が多い印象を受けています。しかし、カントリー・リスクは各国・各地域にあるもの。本当にアフリカが「特に危ない」のでしょうか。たしかに、テロがあります。治安も決してよくありません。道路、水道、電気など、日本では当たり前とされているインフラもありません。とはいえ、日本国内であっても、最初はその地域の特性を理解できずに、ビジネスがなかなか思うように行かない経験をされた方も多いのではないのでしょうか。

世界を見渡してみると、実はどこも天災、人災、民族紛争、独立運動、資源・利権争い等々、数え切れない数の問題を抱えています。一方で、欧米、中国、韓国、どこをみても、内需に頼る経済成長には限界があり、海外への貿易販路拡大に全力を尽くしています。中東の資源がある国は、資源が枯渇する前に、または代替技術の発展で資源のニーズが大幅に低下する前に、国内の産業を立ち上げようと必死です。資源がない国は、どうやって資源を自分たちに有利な条件でもってくるようにするか必死です。日本でも、軍による戦争こそしていないかもしれませんが、国内で「資源争い」や「利権争い」、原発事故の汚染物処理問題などで NIMBY (Not In My Back Yard = 自分の裏庭には来ないで) 現象が各地で起きているのが現状です。

先日、ナイジェリアのプロモーションをされている方が、こんなことを仰っていました。ナイジェリアはたしかにビジネスのしやすさで他地域に劣る。しかしながら、その資源と市場規模の魅力から欧米からの投資がどんどん増えているのも現状であり「性格の悪い美人」のようである、と。「いやあ、美人は苦手で」、とおっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんが、ナイジェリア、そしてアフリカ大陸に人を惹きつける魅力があるのも、また事実です。

欧米による搾取の歴史を持つことから、アフリカ諸国には「ほっておいても、資源をとりにくる外国人」に対し「お客様は神様」と扱う感覚がないのは、ある意味、当たり前なのかもしれません。そうした中、こちらのニーズで海外に出る時、目先の利益追求にばかり目が行き、日本人も忘れがちなことがあります。それは、現地には、その生まれ育った土地を愛し、そのコミュニティのためなら命がけで頑張っている人がいるということです。そこは日本と全く同じです。東北の復興にかける人々の想いと共通するものが、そこにはあります。

「郷に入っては郷に従え」という諺がありますが、「外国人」である我々日本人が相手の国にお邪魔させていただいていること、我々は往復切符を持っており、事件があると日本や他の国に避難することができます。現地の人はその土地に愛着を持ち、根を張って生きていること、その熱い想いを共有し、その土地と人々のために尽くしたいことを伝え、愛され、住民が守りたいと思われる企業に成長することが、国内外問わず、すべての企業の最大のリスク対策であることを、我々は思い出す必要があるのではないのでしょうか。これを理解し、肝に銘じて行動することが、本当の意味での Win-Win の利益追求に繋がるのではないかと思います。

あとは、全ての国にリスクがあるので、どの国に行くかを決めるのは・・・もうこれは「御縁」の世界ではないのでしょうか。人が人と出会う理由は誰にもわかりません。でも、そこに不思議な力が働いているのは確かなようで、たまに片道切符で移住して、その土地を愛する方が出てきたりします。

旧正月のタイミングとなってしまいましたが、遅ればせながら、皆さまとの出会いに感謝しつつ、2013 年も皆さまにとって良き出会いと御縁多き年でありますようにお祈り申し上げます。(2 月 10 日記)

【3】 ロンドンつれづれ雑記帳:「今日も歴史」(毎熊 千代子)

http://komatsuresearch.powweb.com/wordpress/wp-content/uploads/2017/06/column_Today-is-Another-Day-in-History.pdf

昨年 2012 年、英国レスター州の駐車場下から見つかった人骨が、プランタジネット朝／ヨーク家最後の王リチャード 3 世のものと 2 月初頭に発表された。戦場で亡くなった最後のイングランド王リチャード 3 世。評価の分かれる王である。

駐車場は、かつて修道院があったとされる場所にある。床に無造作にペンキで書かれた R の文字 (PARKING か何かの一文字なのだろう)。その下を掘り起こして 1 時間足らずで人骨が発見されたという。調査が始まり、最終的には子孫との DNA 鑑定照合でリチャード 3 世と断定された。因みに、その子孫の男性は現在ロンドンで家具作りをしているとのこと。まさに、世が世ならば、である。

リチャード 3 世は、ヨーク家とランカスター家間の薔薇戦争が始まる 3 年前、1452 年に生まれた。背骨が曲がっていたといい、また兄エドワード 4 世亡き後、幼い甥の摂政となるが、その甥をロンドン塔に幽閉し殺害、自らがリチャード 3 世として王位についた冷血な人間と伝えられる。しかし一方で、この描写は、エリザベス一世 (リチャード 3 世を倒し、ヘンリー 7 世となったヘンリー・チューダーの孫) の下で活動したシェークスピアの史劇によるところが大きく、実は、兄エドワード 4 世には忠実に仕え、3 年にも満たない短い治世中には国民のための改革を実行するなど、正義感の強い優秀な王だったとの見方も以前からあった。

1485 年、レスター州のボズワースの戦いでヘンリー・チューダーに敗れる。享年 33 歳。

今回の調査の結果、背骨が曲がっていたことと、華奢な体躯だったことが確認された。また、遺骨には致命傷と思われる二カ所の傷以外六カ所の傷が頭蓋骨に、その他にも「屈辱の傷 (humiliation injury)」と思われるものも含め数カ所の傷が認められた。死後数日、晒し者にもされたという。遺骨は、掘られた穴が小さすぎたからか、頭は少し前屈みに、手は縛られた形で残っていた。壮絶な死である。勇敢に戦った姿も想像できる。その死を残忍な男の当然の終焉とみるか悲劇とみるか、今後も議論をよぶのだろう。

歴史は厄介で面白い。事実を並べ積み上げ、様々な状況も考察しながら紐解いていく。だがなかなか一筋縄ではいかない。人がどう考え行動したのか同時代の人間でも確実な事は言えないし、その行動への人々の反応も様々だ。誰がそれを後世に伝えたかでも違ってくる。ある意味、究極の真相解明は不可能とも言える。が、だからこそ、深く探求された説得力のある議論は面白い。歴史から学ぶことも多い。将来の歴史となる今に役立つ、何か目の覚めるような歴史観を聞いてみたい。(2 月 19 日記)

【4】事務局からのお知らせ

本メールの全文の転送については、許可不要です。

『KRA 不定期通信』のバックナンバーはこちら: <http://komatsuresearch.powweb.com/wordpress/ja/kratoday>

KRA YouTube チャンネルはこちら: www.youtube.com/user/komatsuresearch

ご意見・お問い合わせ: news@komatsuresearch.com

調査・講演関係のお問い合わせ: info@komatsuresearch.com

メール・アドレスの変更および配信解除: 当メールへの返信でご連絡下さい。

本メールおよびリンク先のホームページに掲載した内容については可能な限り正確を期していますが、万が一誤謬があった場合、コマツ・リサーチ・アンド・アドバイザー（以下 KRA）は一切の責任を負いません。

本メールおよびリンク先のホームページに掲載した内容は、各執筆者の見解に基づき作成されたものであり、KRA の統一した見解を示すものではありません。情報や見解は、予告なしに変更することがあります。

リンクしている第三者のサイトのコンテンツに関しては、KRA はいかなる責任も負いません。

本メールおよびリンク先のレポートの内容を利用したことで発生したトラブルや損害についても、KRA は一切責任を負いませんのでご了承下さい。

Copyright © Komatsu Research & Advisory 2013. All Rights Reserved